

千葉商科大学同窓会

第40回定期総会

第1回「ホームカミングデー」

―

学生との協力で大盛況

今年の同窓会は従来と一

味違うものであった。学生の協力により大学恒例の「瑞穂祭」（11月1日～3日）と同時間開催であり、全国から多くの同窓生を迎えた。



「懐かしの写真展」や同窓生の好意により実現した産地

直送のマーケットをオープンするなど学生・同窓生・一般市民も加わり連日、大いなる賑わいを見せた。



特に11月3日は「ホームカミングデー」として午前10時

から7号館前学生プラザにて島田晴雄学長のウエルカムスピーチに続き、応援団OB、少林寺拳法部のOB・OGによるパフォーマンスがあり見る者を魅了した。学生の案内によるキャンパスツアー、体育会OB会総会（図書館5階

の後、12時から島田晴雄学長の講話「新時代の千葉商科大学と同窓会」は同窓生の母校愛を益々強くした。同窓会定期総会、懇親会をして最後を飾る「CCUC秋の音楽祭」で同窓会は最高潮に達した。こんなに盛況だった同窓会は過去にないであろう。

卒業生のまごころと心意気

安全・安心のマーケット

オープン（1日～2日）

― 産地直送 ―

千葉商科大学同窓会会長

三浦英之氏はじめ役員諸氏の発案に三人の同窓生が両手を挙げて賛同した。

「株式会社まごころ一級屋」

（代表取締役 大野誠治氏・

昭和48年経産

千葉県産の海苔を従来と違った形で味わっていたころというもので「のりジャム」

「のりドレッシング」など栄養価の高い「海苔直屋の夢シリーズ」が並んだ。

「飯島畜産株式会社」代表取締役 飯島俊明氏、昭和53年経産



全国有数の養豚の地、茨城県鉾田からの提供。「甘味とコク」、飼育から生産までこだわりの絶品。「もつ煮込み」は最

高の味

「角上魚類株式会社」(水野博之氏プロデュース・昭和47年経営)

鮮度の有機野菜・果物、瀬戸内のノーワックスみかん、甲府ワイナリーのヴィネガー、ジュースなどがところ狭しと並んだ。

ご協力いただいた三氏にはただ感謝するのみである。

「懐かしの写真展示」
あの時の笑顔がいまここに

(1日～3日)

一番人気は卒業年度別アルバム。自分を見つけてほつとする顔、当事を思い出している顔、今でも変わらないと誇る顔、いろいろな表情が本

館3階に溢れていた。



直近の卒業アルバムはすべてカラーで、まだ若いと胸を張る中高年も時代の流れをを認めないわけにはいかない。合格通知書、学生証、卒業証書なども懐かしい。会場入口の



陰で「商大グッズ」を売る若いOG(CUCサポーター勤務)が印象的だった。

「第1回ホームカミングで

1

(3

日

「ウエルカムスピーチ」

午前10時7号館前学生プラザはまた半分日陰、冷たい風が吹く中で高田晴雄学長のウエルカムスピーチが始まる。



「全国各地で活躍されている

卒業生をキャンパスにお招きし、旧交を温め、本学の現状を知っていただき共に楽しい一日を過ごそうという企画であります。総会の後、CUC音楽会では私もカンツォーネを歌います。カラオケもやりますので皆さんもどうぞご参加下さい」という主旨の挨拶があった。次いで原田理事長のご挨拶があり集まった学生、OB、職員の方々が熱心に聞き入った。

応援団OB

迫力ある演技

出でよ 後継者!

「三三七拍子」「校歌」「商大狸踊り」などドラムの音によくマッチして次々に迫力ある

演技が披露された。特に重量のある校旗を地面に着かんばかりに傾げるあの力強さに思わず拍手を送った。在校生にこの応援部がないのは何とも淋しい限りである。勇気ある若者にぜひこの伝統を受け継いで欲しいと願うものである。



固い木材の床に気合いとともに叩きつける。演技者の中には全国大会で連覇している人もいる。ただただ迫方に感動して見入るばかりであった。商大OB・OGもたいしたもののである。在校生の代表が解説をしていたが彼等の演技もぜひ見せて欲しかった。



OB・OGによる

少林寺拳法の模範演技に

観客感動



第40 回定期総会

— 702教室 —

12時30分 千葉商科大学同窓会第40回定期総会は定刻どおり開会した。

開会の辞 菊池副会長

島田晴雄学長講話

「新時代の千葉商科大学と同

窓会

午後12時702教室にて島田晴雄学長の講話があった。「まず、同窓生の皆様にウエルカム ホームと申し上げたい」という歓迎のことばにはじまり、新時代を迎える同窓会、情報誌「きずな」の発行と今後の発展、厳しさを増す

大学の教育と経営環境、現在
すすめつつある大学の改革、
同窓会と大学は車の両輪であ
り協力・共栄を図っていかね
ばならない。と熱意ある講話
に聴衆一同ますます母校愛の
意を強くした。



三浦英之同窓会長挨拶

会長就任時に唱えたマニ



フェスト 「同窓会サロンの
設置」「定期総会出席者50%
アップ」「ホームカミングデー
の実現」はすべて実行できた
喜び、今後は「厚味のあるネ
ットワークづくりを推進。ブ
ランド力の構築を図る」とい
う内容を力強く説いた。

次いで表彰式

同窓会功労者

有賀義雄（東京都）
井口嘉寿夫（富山県）
川名敏彦（福島県）…欠席



同窓会学生奨励金受給対象者

表彰

同窓会奨学研究論文入選者
同窓会課外活動奨励金
それぞれの代表に授与。

議事（異議なし）

決算報告、予算をはじめ、
いずれも議案のとおり可決さ
れた。

「きずな」情報誌

本日配布の創刊号は無償配
布であるが、第2号からは同
窓会維持会費年五千円（卒業
後5年間は三千円）納入者に

のみ年三冊を配布される。維
持会費の納入者が一人でも多
いことをねがう。

閉会の辞 岩崎剛会長

（終了午後1時30分）

同窓会懇親会

世代を超えてのふれあい

「きずな」深まる

— 本館7階会場 —

懇親会開始前、この期間、
特別に開放されている学長室
を訪れた。学長自ら描かれた
絵画をじっくり鑑賞した。「き
ずな」の表紙の原画も掲げら
れており素晴らしいの一言に
つまる。

懇親会の司会は高橋伸治副
会長（昭和52年商）と濱野和
人氏（平成15年商）。広報

IT委員会の名コンビが務めた。



先ずは、原田理事長の「挨拶。寄付金協力のお礼と詳細な本学の状況報告があった。



乾杯!

三浦会長の声高らかな乾杯の音頭に一同唱和。グラスの音がはじけ世代を超えての交流が始まった。



仲間と卒業以来、はじめての出会いや初対面で名刺を交換する者、コンパニオンに酌をしてもらい喜ぶ者、同窓というよしみがこの会場にいる誰でも会話ができる。「きずな」を深めるとはこんなことをいうのかも知れない。そして、これこそが三浦会長のいう「厚味のあるネットワーク

づくり、ブランド力の構築」の原点ではないだろうか。そんな風に思える懇親会であった。



この懇親会に花を添えてくれたのが、音楽部OB・OG会のメンバーである。「花」「ふるさと」など誰もが知っている歌を披露してくれた。名残り惜しい懇親会もとうやら終宴。音楽部の指導で参加者全員の校歌合唱の後、司会者から、ここで中締めとの合図があった。

中締め



中締めといえばこの人しかない。9月に支部長会会長に就任した坂本周男氏、三四会（同期会）メンバーでもある。「こんなに盛り上がっている懇親会を一人で締めるなんてもったいない。三四会集まれ! 全国支部長集まれ!」メンバーが揃ったところで「よー」豪快な一本締め。最高の盛りりでお開きになった。



CUC秋の音楽会

ワインを飲みながら名曲を聴く優雅なひととき

懇親会に続き同じ会場で音楽会第一部が始まった。

最初に島田晴雄学長の簡単な挨拶と出演者の紹介があり早速開始となる。



学長補佐 政策情報学部教授

内田茂男先生 「出船」

ピアノ伴奏はピアノリストの長友美夏氏



島田晴雄学長

「君を求めて」泣かないお前

ピアノ伴奏は武蔵野音楽大学

及び同大学附属音楽教室ピアノ講師の大坪由里氏



以下交互に

内田教授 「音楽に寄す」

島田学長 「帰れソレントへ」

内田教授「ステンカラージン」

島田学長 「星は光りぬ」

と続いた。アンコールの拍手なりやまず、お二人は今や名曲となった「千の風になって」で応えていただいた。



島田学長、内田教授とお二人のピアノ奏者に花束の贈呈があり、最後は三浦会長も加わり観客と共に全員で校歌合唱のうちに第一部「カンツォーネ&ピアノ演奏」は終了した。



第一部はジャズ演奏 千葉

商科大学教員を中心に集まったバンド「CUCイベルマルシェ」。軽快なリズムについて揺れる。ジャズのスタンダードナンバー「A列車で行こう」に手拍子をする者もいてジャズの雰囲気を感じた。



第二部はカラオケ大会 原

田嘉中理事長の「琵琶湖周航の歌」にはじまり、教授、職員に皆様の素晴らしい歌声を聞かせていただいた。

注目は同窓生の黒田あけみ氏（昭和58年商）はプロとして活躍中であり、加藤登紀子風の雰囲気があり、オリジナル曲の「肩のりぼん」はなかなかのものであった。



秋の日暮は早い。まだカラオケは続いている。CUC秋の音楽会は盛況である。この雰

囲気が大切なのだと思う。

なお、11月1日には同窓会のOB団体の一つ「CUC会計人クラブ」（会長 松崎 信氏 昭和42年商）主催のシンポジウムが7号館で開催された。

「会計プロフェッションの現在と未来」について会計士、税理士、フィナンシャルプランナーがそれぞれの現状と将来展望を述べ、将来を目指す学生の相談に應じた。



最後に

今年の同窓会は三浦会長はじめ企画に携わった運営スタッフが優れていたのであろう。こんなに楽しい会は過去にはなかった。

同窓会と大学が車の両輪となつて動いたことがその要因ではなかっただろうか。これこそがお互いの協力であり、共栄でありやがては母校の発展につながるっていくものであると信ずる。三日間の余韻が残る中、11月3日は静かに暮れていった。

今年、母校に帰ってきた同窓生はこの楽しさを仲間伝え、来年は大勢の仲間をつれて「ホームカミングデー」にやってくるに違いない。

(広報IT委員会)